～社会科　研究実践～

調べたことを社会的な見方・考え方を働かせて再考することで，室町文化と現代の暮らしとのつながりを捉え，価値に迫る学習

～６年「今も受けつがれる室町文化」の実践を通して～

松　田　隆　之

Ⅰ　はじめに

自分の考えを交流する児童の姿

次期学習指導要領において社会科の目標は「社会的な見方・考え方を働かせ，課題を追究したり解決したりする活動を通して，グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に比喩様な公民としての資質・能力の基礎を養う」と示されている。中央教育審議会答申においても，社会科における「深い学び」の実現のためには，「『社会的な見方・考え方』を用いた考察，構想や説明，議論等が組み込まれた，課題を追究したり解決したりする活動が不可欠である」とされ，小学校においては「社会的事象の見方・考え方」を働かせる授業づくりが求められている。

今日，社会科の授業づくりにおいては，社会的な見方・考え方を単元計画の中に位置付け，単元を通して学習問題を解決する学習展開が定着してきている。その一方で，単元が１つのパッケージとして成立する実践は多く見られるものの，調べ学習等で獲得した知識が概念化されず，「社会的事象を覚える」に留まってしまう授業も少なくない。深い学びを実現するために，１単位時間の授業で蓄えられていく知識が「生きて働く知識」へと体系化される学習過程について研究する必要があると考える。

そこで，社会科２年次研究のテーマを　「『社会を分かる』ことを通して，社会的事象と人々の生活のつながりを捉える学習づくり」と設定した。「社会を分かる」とは，社会的事象の特色や意味を考えることを通して概念的な知識を得た状態を指し，「社会を知る」から「社会を分かる」へと，より高次の知識を獲得できる学習づくりについて研究を進めた。

Ⅱ　研究の目的と方法

本研究の目的は，調べ学習等において獲得した社会的事象に関する個別の知識を概念的な知識とするための効果的な手立てについて明らかにすることである。そのために，以下の２つの視点から，授業実践「今も受けつがれる室町文化」における児童の様子について分析する。

①　「社会的事象の見方・考え方」を働かせ，学びを深める単元構成

②　子供たちの中に問いを生み出す教材化・資料提示の工夫

なお，研究の対象とした単元の概要は以下の通りである。

１　単元名　「今も受けつがれる室町文化」

２　単元の目標

室町時代に生まれた文化について調べる活動を通して，室町文化の特色を理解するとともに，室町文化と現代の暮らしとのつながりについて捉えることができる。

３　単元の概要

調べ学習を通して，水墨画，茶の湯，生け花等の「室町文化」についての個別の知識を獲得した。単元を通して「室町文化が現代にも残っている理由」を問い続け，室町文化の特色や日本の歴史における役割について，現代の暮らしと関連付けながら捉えた。

Ⅲ　結果と考察

１　「社会的事象の見方・考え方」を働かせ，学びを深める単元構成

(1) 結果

「社会的事象の見方・考え方」を単元計画の中に位置付けることで，子供たちの問いを立てる上での「視点」と調べたり考えたりする「方法」が定まり，学びを深めることができると考えた。

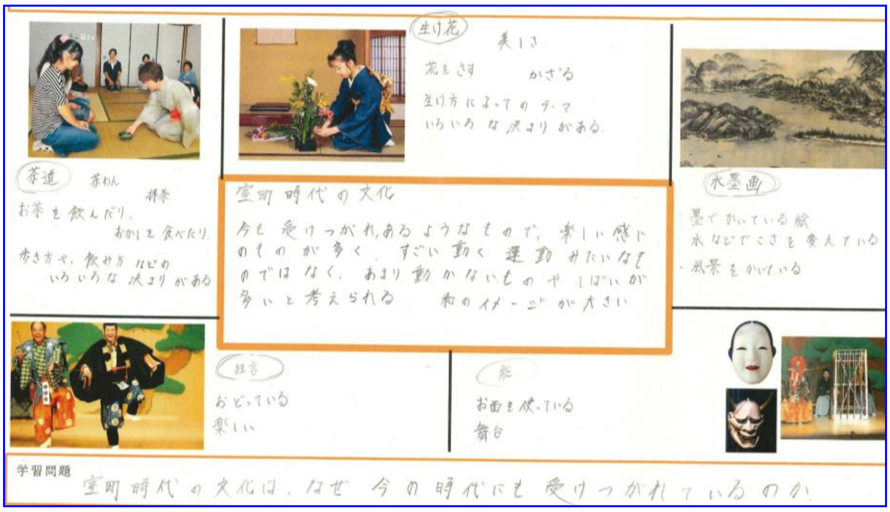
単元の導入場面では，「水墨画」「茶の湯」「生け花」「能」「狂言」といった室町文化に大成した５つの文化を比較しながら，それぞれの文化から受けるイメージや文化の共通点等を言語化していった。子供たちは，関係的及び時間的な視点を働かせ，室町文化が日本らしさを象徴する文化であることや今の時代にも受け継がれていることに気付き，そこから「なぜ，室町文化は今の時代にも受けつがれているのだろう。」という学習問題をつくることができた（資料２）。

学習問題の解決のために，２時間目では５つの文化から１つを選択して調べ，３時間目でそれぞれが調べた文化について共有する時間を設定し，室町文化についての事実認識を高めた。４時間目では，既習事項を用いて銀閣寺東求堂同仁斎が国宝である意味を考えながら，関係的な視点を働かせて「庶民にも文化が広がっていった」という室町文化の価値に迫った。

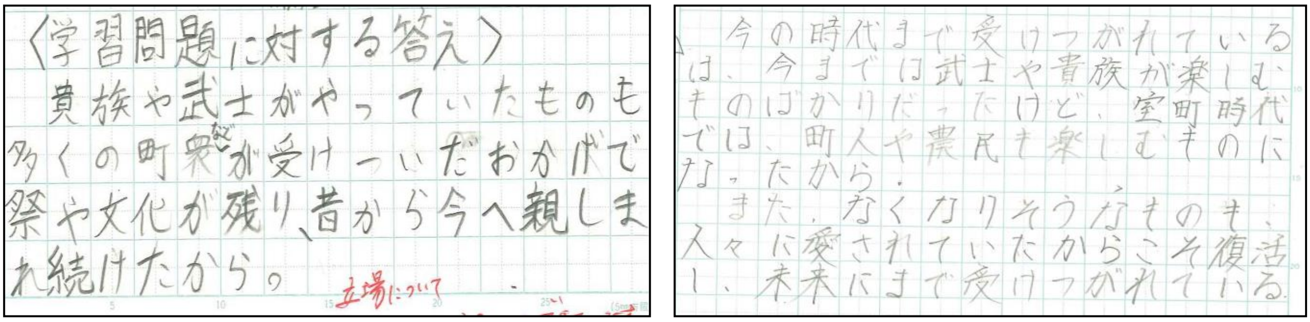
まとめの時間では，京都の祇園祭を再興させた町衆の活躍に焦点を当て，これまで学習した室町文化との共通点を想起しながら「学習問題に対する最終的な自分の考え」をまとめた（資料３）。

段階	時間	主な学習活動	主に働かせる見方・考え方　視点	主に働かせる見方・考え方　方法
学ぶめあてをもつ	①	◇水墨画，茶の湯，生け花，能，狂言の写真を見て気付いたことを話し合い，学習問題をつくる。	関係的 時間的	比較・分類
		学習問題 なぜ，室町文化は今の時代にも受けつがれているのだろう。		
確かな追究・解決	② ③	◇水墨画，茶の湯，生け花，能・狂言について調べ，調べたことを学級全体で交流する。	関係的	比較・分類
	④	◇東求堂同仁斎が国宝である意味について考え，室町文化と現代の暮らしとのつながりを捉える。	関係的 空間的	国民の生活と関連付け
まとめ	⑤	◇京都の祇園祭とこれまで学習した室町文化の共通点を基に，学習問題に対する考えをまとめる。	関係的 時間的	総合

資料１　「社会的事象の見方・考え方」位置付けた単元計画



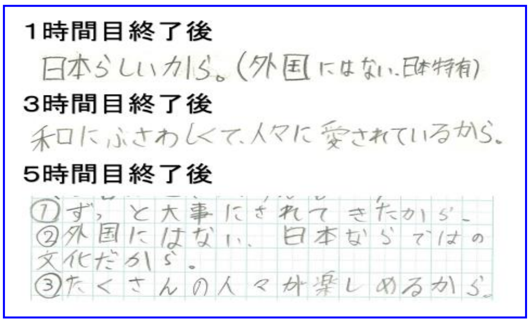
資料２　学習問題づくりにおける児童のワークシート



資料３　学習問題に対する最終的な自分の考え

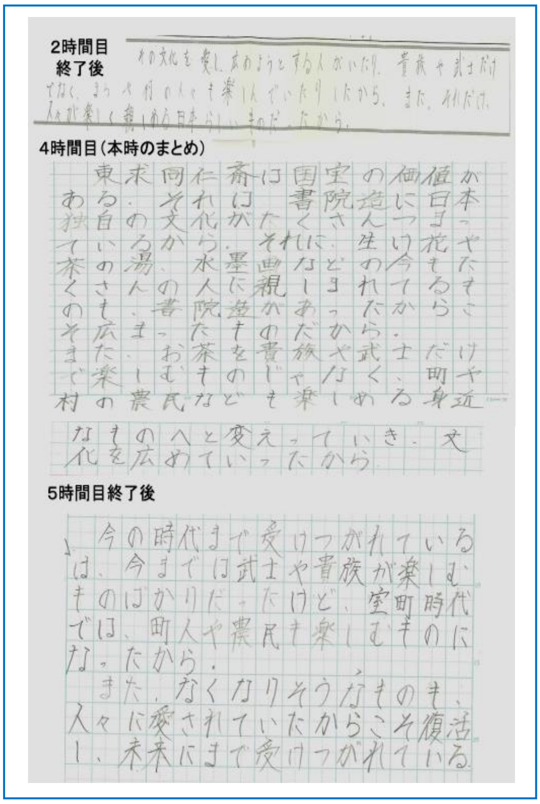
(2) 考察

「社会的事象の見方・考え方」を働かせる目的は,「深い学び」を実現することである。その手段として,「社会的事象の見方・考え方」を働かせる問いや学習活動を単元計画に位置付けた。本実践における学びの深まりについて，１単位時間の授業後に記述した「学習問題に対する自分の考え」から分析する。



資料４　A児の「学習問題に対する自分の考え」の変容

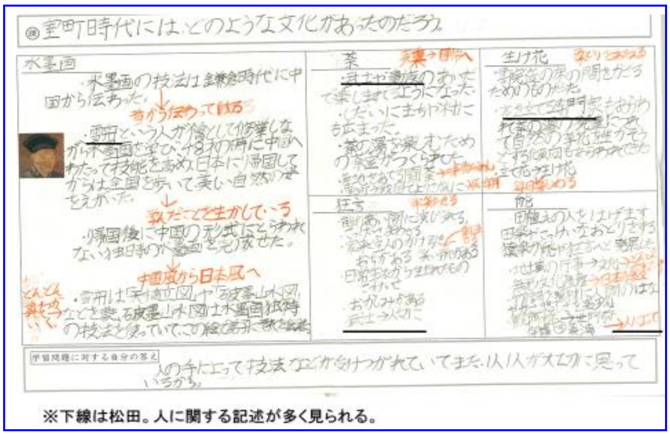
Ａ児は，１時間目の時点で５つの文化の特徴から「日本独自」の文化であることを捉えたが，人間の営みに関する記述は見られず,本単元で捉える「貴族や武士といった特定の身分だけではなく,多くの人々に文化が広がっていった」という関係的な視点が働いていなかった。しかし，２時間目，３時間目に「室町文化にはどのような文化があったのか」という事実を追究する学習を経て，関係的な視点が働き「人間の営み」という視点で学習問題について考えていることが分かる。単元の終末には室町文化が現代にも受け継がれている理由を「ずっと大切にされてきた」という時間的な視点も働かせて３点述べている。



資料５　B児の「学習問題に対する自分の考え」の変容

Ｂ児は，２時間目の調べ学習の段階で「能の原点である田楽や猿楽は，人々の生活から生まれたものであること」から貴族や武士以外の立場の人も文化を親しんでいることに気付いていた。既に室町文化の特色は捉えていたが，さらに社会的事象の意味を考える時間において「東求堂同仁斎から生まれた文化が庶民に根付いていったこと」を押さえ，祇園祭における町衆の活躍と関連付けながら,「未来に受けつがれる」という時間的な視点を働かせて学びを深めていることが分かる。

Ｃ児は，２時間目，３時間目で「人々の手によって文化が受けつがれている」ことを捉えたが,そこには,自分が調べ学習で選択した「水墨画」と友達が調べた「茶の湯」,「能」の共通点を捉える関係的な視点が働いている。人間の営みと文化の発展の関係性に気付き,「それぞれの文化にその文化を生み出したり，大成させたりする人がいて，そうした人々の思いによって文化は広がっていく」と捉えたのである。本単元のねらいは「室町時代の文化は，美しさや落ち着いた空間を大切にした和風の原点であり，貴族や武士だけでなく庶民にも親しまれたことによって日本の文化として根付き，現代の日本の生活とつながっていることを捉えさせること」である。これまで学習した時代からの大きな変化として「庶民への広がり」に着目できるような単元構成を意識した。学習問題に対する自分の考えとして，１時間目の時点で「庶民への広がり」について記述することができた児童は６名（18%）であったが，まとめの段



資料６　Ｃ児の２，３時間目のワークシート

階では全員が記述することができた。学習内容に応じて,「何に着目させ，どのように考えさせていくのか」を押さえた上で単元を構成することは，社会的事象の見方・考え方を働かせる経験を積み重ね,「生きて働く知識」を獲得する上で有効な手立てであると考える。

2　子供たちの中に問いを生み出す教材化・資料提示の工夫

(1) 結果

深い学びを実現するためには，子供たちの中に「どうしてだろう」「なぜだろう」といった問いを生み，追究意欲を喚起させる教材や資料との出会いが重要である。

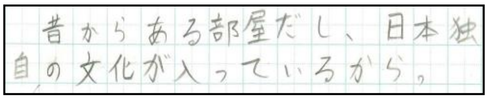
本時では，日本の歴史における銀閣寺が果たした役割について,「文化の広がり」という視点で再考することを通して，室町文化の特色を捉えさせた。

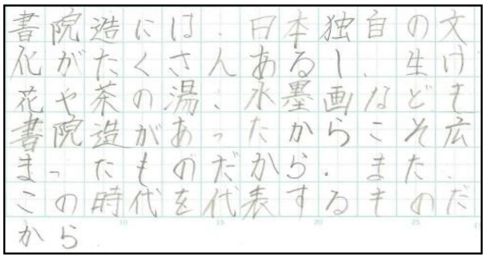
まず，授業の導入で金閣と銀閣を提示し,「どちらが国宝か」について考えた。単元が始まる前の事前調査では，金閣を国宝と考える児童も多かったが，室町文化についての調べ学習を進める中で,「日本らしさ」「落ち着きある文化」といった室町文化の特色に着目する児童が増え，本時では全員が「銀閣」が国宝であると答えた。

資料７　本時で使用したスライド

次に，銀閣の隣にある東求堂同仁斎の写真を見せ,「東求堂同仁斎」も国宝であることを伝えると，数名の児童が「銀閣が国宝でその隣にある建物も国宝っていうのはおかしい。国宝はそんなに多くないと思う。」「すごく嫌な言い方かもしれないけど，正直に言うとどこにでもありそうな部屋だと思った。」といった反応を示した。室町文化についての調べ学習を進めていたこともあり,「落ち着いた雰囲気が国宝にふさわしい」と考えた子も多くいた。しかし，それはあくまで見た目の印象であったため，本時の課題を「東求堂同仁斎には，本当に国宝の価値があるのだろうか。」と設定し，東求堂同仁斎が国宝である理由を考えていった。

子供たちは前時までの学習内容を想起して，東求堂同仁斎が書院造であることに気付き，部屋の細部に着目した児童の「部屋の中に日本独自の文化がある」といった発言から，書院造と室町文化の関係性を適切に捉えていった。





資料８　本時の課題に対する児童の考え

さらに学びを深めるために,『七十一番職人歌合』に収録された僧や茶売り商人が寺の参拝客に安価で茶を提供する「一服一銭」の様子を新たな資料として提示した(資料８)。この資料を基に「誰が誰に対してお茶を売っているのか」を考えた。ただ，この資料だけでは，商人や僧がお茶を売っていることは読み取ることができても「誰に対してお茶を売っているのか」を読み取ることはできない。そこで『洛中洛外図屏風』で描かれた茶屋の前でお茶を飲む庶民の様子を補足資料として提示した（資料10)。

資料９　学びを深める新たな資料

資料 10　補足資料

新たに提示された２つの資料から，書院造（和室）の空間で大成した茶の文化が商人を介して町に広がっていったという「空間的な見方」と貴族や武士といった特定の身分に限らず，庶民にも根付いていったという「関係的な見方」を働かせながら，「文化の広がり」という視点で学びを深め，室町文化の特色を捉えることができた。

(2) 考察

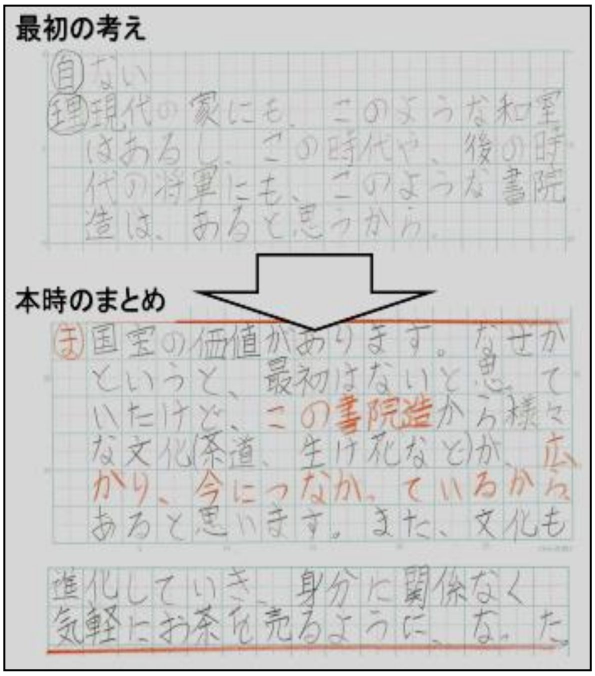
本時の課題に対して，「国宝の価値がある」と考えた児童が29名，「国宝の価値がない」と考えた児童が５名のところから授業はスタートした。

Ｄ児は，授業の序盤では，東求堂同仁斎に特別な感情を抱かず,「後の時代にも同じような和室はある」と捉えていた。しかし，自分とは反対の「国宝の価値がある」と考えた児童の考えを聞いたり，新たに提示された資料を読み取っていたりする中で，東求堂同仁斎から文化が広がっていったことを捉えていった。

最終的には，最初に「国宝の価値がない」と考えた５名の児童も全員,「文化の広がり」について理解し，室町文化の特色を捉えることができた。

「国宝の価値があるか」を考え，理由を議論することを通して，多くの児童が室町文化の特色に迫ることができたことを考えると，文化の特色を捉える上で価値判断に迫る本時の問いは有効であったと考える。しかし，根拠の薄い議論になることを避けるために，事実として「東求堂同仁斎は国宝である」と前置きした上で,「本当に価値はあるのだろうか」という課題を設定したことにより，児童の発想を妨げてしまい，予定調和ともとれる展開であったという見方もできる。

東求堂同仁斎を見せた段階で「国宝である」という事実は伝えず,「東求堂同仁斎は国宝だと思うか」を問い，理由を議論する方法も考えられる。ただ, その場合においても,「国宝の価値があるかどうか」を議論することが目的なのではなく,「室町文化の特色を捉える」ための手段であることについて留意する必要がある。



資料 11　本時におけるＤ児の考えの変容

Ｔ :「東求堂同仁斎は国宝です。これを聞いて，‘えっ？なんで？’と思った人いますか？」
→挙手をした数名の児童に指名する。
Ｓ :「普通の和室で特別な感じがしないから。」
Ｓ :「銀閣は建物としても見栄えがするから分かるけど，隣にある‘サブ’のような感じがするから。」
Ｔ :「でも，国宝なんです。」
→児童の発言を基に，課題を設定した。

資料 12　本時の課題までの展開

学びを深める新たな資料として提示した「一服一銭」の資料は,「茶室から町へ」という空間的な視点と「茶の文化が庶民にも広がった」という関係的な視点から，文化の広がりを捉える上で効果的な資料であった。ただ，一服一銭の資料を提示したときに，思考が止まってしまった児童が多くいたことを考えると，資料の提示の仕方について改善を図る必要がある。

右の資料を見たときに，左右の人物の関係性に着目してしまった児童が多く，どちらも売り手であることに気付くことができない児童が多くいた。

改善策として，２人の人物を順番に提示する方法が考えら

資料 13　資料提示の代案

れる。一方の人物を隠しておき，「何をしているか」を考えた後に，隠していたもう一方の人物を出すことにより，２人が同じ売り手であることを適切に捉えることができたと考えられる。
また，売り手と買い手の構図を適切に捉えさせることに主眼を置いて，補足資料として扱った『洛中洛外図屏風』に描かれた庶民の様子のみを提示する方法も考えられる。

Ⅳ　まとめ

本研究では，調べ学習等において獲得した社会的事象に関する個別の知識を概念的な知識とするための効果的な手立てについて，「『社会的事象の見方・考え方』を働かせ，学びを深める単元構成」と「子供たちの中に問いを生み出す教材化・資料提示の工夫」の２点から論じた。その成果と課題を以下に示す。

１　成果

○学習内容に応じて，「社会的事象の見方・考え方」を単元計画の中に位置付けることで，学びを深める上で効果的な問いや学習活動を設定することができ，学習問題づくりから概念的な知識の獲得までに至る学習過程について構造化することができた。
○「社会的事象の見方・考え方」を働かせて課題を追究したり解決したりする活動を繰り返すことにより，児童は知識を相互に関連させながら学習を進めることができ，授業で蓄えた知識を「社会を分かる」知識へと体系化することができた。
○新たな視点で社会的事象を捉えたり，人間の営みに着目したりすることができるような教材化・資料提示の工夫をしたことで，社会的事象と国民生活のつながりを論理的に考える力を高めることができた。

２　課題

○学びが深まっていることを児童自身が実感するためにも，単元の中で学習問題に立ち返る時間を設定し，学習問題に対する自分の考えを更新させていく実践を積み重ねる必要がある。
○児童の中に問いが生まれず，課題意識がないまま個の追究活動を進めてしまう姿も見られたため，①個人課題を設定する，②複数の課題から選択する，③課題を全体で共有する等，自分事として課題を解決することができるような学習活動について研究を進める必要がある。

Ⅴ　参考文献

○小学校学習指導要領解説　社会編　文部科学省　東洋館出版社　平成29年７月
○幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策について（答申）　中央教育審議会　平成28年12月21日
○初等教育資料　No.946「社会科において育成を目指す資質・能力」
文部科学省　東洋館出版社　平成28年11月
○初等教育資料　No.953「学習指導要領改訂のポイント」
文部科学省　東洋館出版社　平成29年５月
○初等教育資料　No.960「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」
文部科学省　東洋館出版社　平成29年11月
○初等教育資料　No.965「新学習指導要領に向けた指導の在り方」
文部科学省　東洋館出版社　平成30年３月
○小学校新学習指導要領ポイント総整理　安野功・加藤寿朗・中田正広・石井正広・唐木清志
児玉大祐・小倉勝登　東洋館出版　平成29年９月
○見方・考え方―社会科編―　澤井陽介・加藤寿朗　東洋館出版　平成29年10月
○小学校社会科学習指導案文例集　澤井陽介　廣嶋憲一郎　東洋館出版社　平成30年３月